

家庭・学校・地域で連携したいじめ予防活動の推進

後藤 綾文*・瀬戸美奈子**

Promotion aimed at preventing bullying cooperated with family, school, and community:
— A preventing bullying project with solution focused approach —

Ayafumi GOTO and Minako SETO

要 旨

本研究では、2016 年と 2017 年度の 2 年間にわたり、子ども、保護者、教職員等学校関係者、地域住民を参加者とするいじめ予防プロジェクトを実施した実践を報告し、そこから家庭、学校、地域の連携の必要性和今後のいじめ予防に関する実践の課題について検討した。2016 年は今の子どもたちが抱える問題について心理教育的な講演とインターネット関連事業者により若者のインターネット利用に関する講演を、2017 年は小学校でソーシャルスキルトレーニングの実施経験のあるスクールカウンセラーによる講演とともに、いじめ予防ワークショップを行った。いじめ予防ワークショップの実施法には、ソリューション・フォーカスト・アプローチの技法が取り入れられた。いじめ予防プロジェクト全体のアンケート結果から、参加者にとって、家庭・学校・地域それぞれの立場からの意見や考えを共有し、いじめ予防について話し合う貴重な機会となったことが確認された。今後の課題として、いじめ予防に関する実践への参加者を増やす仕組みといじめ予防への意識を維持するための工夫を検討する必要性が挙げられた。

キーワード：いじめ、小中学校、家庭、地域、ソリューション・フォーカスト・アプローチ

問題と目的

「平成 27 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省，2016）では、小学校でのいじめ認知件数が 151,190 件、中学校でのいじめ認知件数が 59,422 件と報告されている。いじめによる不登校やひきこもりだけでなく、全国的にいじめによる自殺も生じており、学校現場ではいじめの問題への対応が喫緊の課題となっている。

いじめは、被害者、加害者、観衆者、傍観者の 4 層構造から成る（森田・清水，1986）と言われており、学級の多数を占めるだろう傍観者の存在はいじめの長期化、助長の要因とされている（森田・清水，1986，清水・瀧野，1998）。いじめをしようとする加害傾向については、学級の中でいじめに対して否定的な規範がある場合には抑制されることが示されている（大西・黒川・吉田，2009）。Goto (2017) は、傍観者である、いじめを見聞きした子どもたちが教師にいじめの

事実を相談しにくい理由について、大学生を対象にした自由記述調査から検討している。いじめ加害者が親しい仲間集団に属している場合や、いじめ被害者が親しい仲間集団に属していない場合、いじめを見聞きしても子どもたちは教師への相談を控えることが指摘されている（Goto, 2017）。仲間集団として学級集団として学校として、いじめを否定する規範ができていなければ、いじめ加害者がいじめを止めること、いじめを周囲で見ている子どもがいじめを止めることは難しいと考えられる。いじめ被害者や加害者との関係、他の子どもたちがどう思うかがいじめ予防には大きく関わっているのである。

このような現状をふまえ、学校現場ではいじめ対策・予防を目的とした授業やプログラムが行われてきた。戸田（2013）によると、いじめ対策・予防のプログラムはいじめ研究とともに発展しており、1990 年代には現在まで使用されている、ピア・カウンセリング、非叱責法、劇を使う方法などの多様なプログラム

* 福井大学保健管理センター

** 三重大大学教養教育機構

が展開されてきたことが報告されている。国内外における暴力やいじめの防止プログラムの取り組みでは、ソーシャルスキルや問題意識、気持ちのコントロール力を高める取り組み、ピア・サポートなどの包括的なプログラムが多いことが指摘されている(松尾, 2002)。上記のようないじめ予防プログラムを通して、いじめを否定的に捉える学級規範ができることはいじめ防止に大いに有効と考えられる。

しかし、いじめ予防においては子どもたち同士の関係だけでなく、子どもたちの周りの環境にも注目する必要がある。教師から受容されていると感じ親近感を抱き、教師からの指導を評価しているほど、いじめを否定する規範が高まることが示されている(大西・黒川・吉田, 2009)。一方、不適切に教師が権力を示すと捉えている子どもほど、いじめ加害傾向が高いという結果も見出されている(大西・黒川・吉田, 2009)。教師の言うことを聞かないと罰を受けると捉えているほど、反抗的な態度が高まることも指摘されている(三島・宇野, 2004)。教師への信頼感や教師の対応への期待の低さが、いじめを見聞きした際に相談しにくい理由として大きいことも指摘されている(Goto, 2017)。このように、いじめ防止には教師の日常的な関わりや教師と子どもたちとの関係性も関わってくると考えられる。

保護者もいじめ予防にあたって、重要な存在である。いじめの発見のきっかけとして、保護者からの訴えが小中学校のいじめでは一定の割合を占めている。小学校では、アンケート調査(55.5%)、本人(15.1%)、教師(12.4%)、保護者(10.7%)の順、中学校では、アンケート調査(40.5%)、本人(22.0%)、教師(11.0%)、保護者(13.3%)の順となっている(文部科学省, 2016)。悩みや心配事を相談する相手として、小学生が最も選ぶのは保護者(母親)であり(学研教育総合研究所, 2013; 佐藤・渡邊, 2013)、中学生であっても友人や保護者を相談相手として選びやすいことが指摘されている(永井, 2012; 石隈・小野瀬, 1997)。保護者は、いじめについて相談できる身近な大人といえる。

また近年、子どもの健全な発達における地域住民の存在の重要性が再認識されてきている(文部科学省, 1999)。地域に対する愛着を高めることは子どもたちの向社会的行動を高めることが示されている(尾関・朴・中島・吉澤・原田・吉田, 2008)。地域住民との公的交流や私的交流が地域への愛着や地域からの恩恵や助けを感じさせ、向社会的行動を促すことも指摘されている(尾関・吉澤・中島・吉田・原田・吉田, 2009)。これらから、地域住民との日常的な関わりから、地域の大人がいじめに対してどのような態度を持っているかを知ることができ、そのような大人の姿を

見ることは、子どもたちのいじめ加害傾向を下げ、いじめの発生を抑える効果があると推測される。

以上より、いじめ予防を考えるにあたり、子どもたちが経験しているいじめの現状を家庭、学校、地域が共有し、子どもたちと共にいじめについて考え、いじめを予防する活動を考えることが重要といえる。教師にとっては他教師の様々な対応を学び、保護者にとっては家庭での子どもへの関わり方を見直すきっかけとなり、地域の方々にとっては地域での子どもへの見守りや子どもとの関係づくりへの示唆が得られると考える。子どもたちもプロジェクトに参加することで、子どもたち自身が日常生活や学校生活をふり返る機会となり、いじめを抑止しようとする意識、態度の向上が図られると考える。さらに、いじめについて、家庭、学校、地域が子どもたちのことを考えることは地域活性化につながるとも考えられる。

そこで、本実践では、子ども、保護者、教師、地域住民が参加する、子ども理解に関わる心理教育的な講演といじめを防ぐための環境づくりを目的としたワークショップの2つで構成されるいじめ予防のためのプロジェクトを実施した。なお、プロジェクトの実施法には、ソリューション・フォーカスト・アプローチの技法を取り入れた。

ソリューション・フォーカスト・アプローチ(解決志向アプローチ)とは、Steve de ShazerとInsoo Kim Berg主導のもと、ブリーフ・セラピーセンターで主に開発された心理療法モデルである。彼らはクライアントの抱える問題の解決のためにより良い方法を研究する中で、クライアントに以下4つのことに集中させるように会話を持っていくと、クライアントに変化をもたらすのに一番効果があることを指摘している。その4つとは、「望んでいる未来について話す」、「過去の成功体験に着目する」、「すでに存在する強みを評価する」、「うまくいっていることをもっと続ける」である(Young, 2009 黒沢 2012)。ソリューション・フォーカスト・アプローチでは、クライアントの問題について掘り下げて詳細に聞いていくのではなく、これから先の未来についてイメージさせ、今後起こってほしいこと、その際にはどのような行動をとっているか、どのようなことで変化に気づくかなどを詳細に聞いていく。

そのため、解決志向のいじめ予防活動では、いじめがない状況を安全で子どもたちが仲良く協力しあえる状況としてイメージさせる。そして、仲良く協力しあえた過去の成功体験を思い出させ、自分や周りの子どもたちがそもそも持っている強みや良さに目を向けさせ、成功体験や強みに基づいた経験を強化させることを重視している(Young, 2009 黒沢 2012)。本プロジェ

クトは子ども、保護者、教師、地域住民の4者が参加するため、なかには、いじめを受けているまたは受けた経験のある子ども、過去にいじめを受けた経験のある大人も参加することが推測される。直接的にいじめを題材として考えさせる方法では、いじめに関する記憶をその場で呼び起こしてしまい、心理的に侵襲的なものになる可能性があり、避けなくてはならない。そこで、いじめがない、いじめを予防できている状態、つまり子どもたちが学校で快く過ごせ、保護者、教師、地域住民が協力して子どもたちを暖かく見守る理想の状態をイメージさせる、ソリューション・フォーカスト・アプローチの技法を用いることとした。

本研究では、家庭・学校・地域で連携したいじめ予防プロジェクトを2年間継続的に行った実践報告と、そこから、家庭、学校、地域の連携の必要性と今後のいじめ予防に関する実践の課題について検討する。

方 法

1. いじめ防止プロジェクトの対象者

A 県 B 市教育委員会と連携し、B 市内の全小中学校にいじめプロジェクトの実施案内チラシを配布した。2016 年は、保護者 14 名、教職員等学校関係者 7 名、地域の子ども支援関連機関職員等（地域住民含む）13 名、計 34 名が参加した。2017 年は、子ども 7 名、保護者 16 名、教職員等学校関係者 9 名、地域の子ども支援関連機関職員等（地域住民含む）6 名、計 38 名が参加した。

2. いじめ防止プロジェクトの実施時期・場所・方法

2016 年 2 月に保護者、教職員等学校関係者、地域の子ども支援関連機関職員等を対象としたものを行い、2017 年 2 月には 2016 年の参加者に子どもも対象に加えたプロジェクトを実施した（表 1）。実施場所は、B 市教育委員会内の一室を用いた。参加者には 4 名から 5 名をメンバーとするグループに分かれるよう指示し、座ってもらった。プロジェクトは、子ども理解に関わる心理教育的な講演といじめを防ぐための環境づくりを目的としたワークショップの 2 つで構成された。2016 年は臨床心理学を専攻する大学教員（研究協力者）により心理教育的な講演とインターネット関連事業者により若者のインターネット利用に関する講演を、2017 年は小学校でソーシャルスキルトレーニングの実施経験のあるスクールカウンセラーによる講演を実施した。2016 年、2017 年ともにいじめ予防ワークショップは研究実施者が主に担当した。また、両年ともに B 市教育委員会により B 市内のいじめアンケート調査結果についての報告もなされた。プロジェクト実

施後には、研究実施者による振り返りやフォロー（プロジェクト後の個別相談等）が行われた。

3. プロジェクトの内容

2106 年の講演では、講演①として大人が知っておくべき子どもたちのインターネット利用の現状やネットいじめについて講演を行った。インターネット利用によるいじめも含めたトラブルは子どもたちにとって現代では身近なものとなっており、大人がインターネットの知識や特性をまず理解し、子どもと利用について話し合うことなどを伝えた。講演②として今の子どもたちの抱える問題について講演を行った（図 1）。インターネット上での友だち〇〇名達成や、LINE でのブロック大会を行うことで友だちである人と友だちでない人を確認する行動など、子どもたちの「友だち」の在り方を紹介した。「暗い子と思われたくない」という心理から生じる友人関係の軋轢や、好きなことが 24 時間でできる現代の生活では適当なところで我慢したり折り合いをつけたりすることを学ぶことが難しく、友人関係においても苦手な子とどう付き合うかが難しくなっていること、子どもの言動の背景にある気持ちを確認し取ろうとする大人の大切さを伝えた。

2017 年度の講演では、子どもの参加者もいることから、ソーシャルスキルトレーニングの技法を取り入れたゲーム性の高い講演を行った。錯視の図柄を用いながら、大きさや長さが同じ物でもそれらが異なって見えることがあること、図と地のどちらに注目するかで見える図柄が変わってくるなどを子どもたちに体験させ、人の見え方には「クセ」があることを紹介した。そして、友だちとのコミュニケーションの中で誤解して否定的に捉え、友だちと気まずくなる例をあげ、コミュニケーションにも「クセ」があることを紹介した。自分も相手も大切にすさわやかなコミュニケーションである「アサーティブ」なコミュニケーションをとることの大切さを伝えた。

2016 年、2017 年ともにワークショップでは、ソリューション・フォーカスト・アプローチの手法を用いて、望む未来である、理想の「いじめのない、いじめを予防できる学校・家庭・地域」がどのような状況、状態なのかということをグループで意見を共有してもらった。理想の状況や状態であるので、参加者は気軽に意見を言うことができ、どのグループも、子どもたちが学校や家庭、地域で快く過ごせ、保護者、教師、地域住民が子どもたちに関わり、子どもたちの成長を暖かく見守るというような状況や状態を挙げていた。次に、グループのリーダー役の人に、「そのような理想の状況や状態になったら、子どもへの関わりや友だちへの関わり、今の生活がどのように良くなると思う？」

表 1 2016 年、2017 年のプロジェクト概要

2016 年プロジェクト概要	2017 年プロジェクト概要
2016 年プロジェクトテーマ 「いじめをなくすためにできること——子どもたちの今、わたしたちの今——」	2017 年プロジェクトテーマ 「いじめをなくすために、今、わたしたちができること——アクションメッセージツリーを作ろう——」
教育委員会による、いじめアンケート調査報告	教育委員会による、いじめアンケート調査報告
講演①「子どもたちの今——子どもたちの内面をみつめる——」	講演①「子どもたちは何を求めている？——見え方、受け止め方、話し方のクセとアサーション——」
講演②「ネットを利用する子どもたちの実態」	
ワークショップ「いじめをなくすために、わたしたちができること」	ワークショップ「いじめをなくすために、今、わたしたちができること——アクションメッセージツリーに思いを集めよう——」



図 1 2016 年度の講演②



図 2 アクションメッセージを飾る参加者の様子

という質問をグループの中で繰り返してもらった。研究実施者より全体に向けて、「今とどのように違ってきますか？」「どんな風にあなたは行動していますか？」などの追加質問も行った。解決志向の会話や質問により、参加者の関心をいじめがなくなることよりも、何を求めているのかという点に注目させた。さらにグループで意見を共有してもらい、最終的に参加者がそれぞれの立場で、いじめを予防するにあたって今から自分ができると思うこと、普段の生活の中で自分が大切にしたいと思う行動を、「アクションメッセージ」と名付けて色紙に書くように指示した。各自が記入した内容を、「アクションメッセージ」として全体の前で宣言し、色紙をクリスマスツリーに飾り付けてもらった（図 2）。終了時に、研究実施者より参加した大人に向けて「子どもたちへの日々のサポートが、いじめのない、いじめを予防できる学校・家庭・地域をつくること」、子どもに向けて「いじめを受けたり見聞きしたりしたら、助けてくれる大人がいることを覚えてほしいこと」を伝えた。

全体を通して、研究実施者がファシリテーターとし

て、グループの様子を見まわり、ときには参加者の意見交換を促し、傾聴する見本となり、他者に対して受容的な雰囲気 of the ワークショップに向かわせるという役割も担った。

プロジェクト終了後、参加者にアンケートへの回答を求めた。

結果と考察

プロジェクト終了後のアンケート（付録 1）には、「子どもたちが通う市内小中学校の現状を知ることができた」、「日常の関わりの大切さを改めて考えさせる良い機会となった」、「保護者、子どもと立場の違う方と話すことで、教職員とは違うイメージを持っているのを知れて良かった」、「学校現場ですぐにいかせる内容だと思うので、同僚に職場に還流報告したい」、「『何ができるか』を考える機会は、いつ、いくつあっても良いと思うので、様々な機会にみんなで考えたい」、「小さな事でも、行動を起こすとは、大切だなと思いました」、「理想を描き、そのために今日からできる小さな

行動を具体的に考えることの良さを感じられました」などの記述がみられた。家庭・学校・地域それぞれの立場からの意見や考えを共有し、いじめ予防について話し合う機会となったことがうかがわれる。これは、ただ意見を共有しただけではなく、子どもたちにとっては、いじめについてこれだけ一緒に考えてくれる大人がいるということを知る機会にもなっている。深刻な悩み（自殺念慮）を持つ生徒であっても、教師が助けてくれると感じている生徒ほど、教師に相談を行おうと思ひやすく、実際に相談を行っていることが示されている（Pisani, Schmeelk-Cone, Gunzler, Petrova, Goldston, Tu & Wyman, 2012）。本プロジェクトのような機会は、実際にいじめを受けた際あるいはいじめを見聞きした際に、自分の周囲に自分を助けてくれる大人がいることを想起させ、周囲の大人に対する相談の行いやすさにつながっていくであろう。いじめの問題が生じた際に、家庭や学校、地域のそれぞれが対応することも重要であるが、いじめの問題が生じる前から、家庭や学校、地域がつながり、子どもたちを見守り、いじめを予防することが重要であると考ええる。

また、この「アクションメッセージツリー」は、プロジェクト後に市内図書館や市役所に、ワークショップの内容や意義についての説明文書とともに飾られ、地域の方々も自由にアクションメッセージを色紙に書くことができるように設置された。本プロジェクト後には、地域の小学校、中学校、子ども支援に関わる関連機関へのクリスマスツリーの貸し出しを開始し、同様のワークショップが市内の小学校や子ども支援団体により実施されている。B 市内において、いじめ予防の意識向上、いじめ予防活動の活性化に大いに寄与できたと考えられる。

さいごに、本プロジェクトの実施をふまえ、いじめ予防活動全体に言える課題を以下に 2 点を挙げる。本プロジェクトは市内全小学校、中学校に広報チラシを配布し、参加希望者に参加申込をしてもらった。そのため、プロジェクトに参加した者はすでに、いじめやいじめ予防に対して関心が高い者が多いことが推測される。すでに子どもや教員とより良い関係が築けている保護者であったり、地域の子どもの健全な発達に関心の高い住民であったりもするだろう。今後、いじめ予防活動を地域で実施する場合には、参加申込者数を増やすとともに関心の低い者が参加するようなプロジェクトを企画、または参加する仕組みをつくっていく必要がある。例えば、市内ではなく学区単位でいじめ予防イベントを行い、学区内小中学校を会場とすること、小中学校教員と連携し小中学校の学校イベントとすることなどが考えられる。

次に、本プロジェクトではソリューション・フォー

カスト・アプローチの技法を用いることで、参加者がプロジェクトで宣言した「アクションメッセージ」の行動が強化されやすいことが推測されるが、日常の中でどこまで継続して行われるかは疑問が残る。参加者の中には、「アクションメッセージを忘れないように」と写真を撮る参加者もいた。学校内で予防活動をした際には、「アクションメッセージ」をかけたクリスマスツリーを飾ったり「アクションメッセージ」を壁面に飾ったりなど目に見える形で提示していくことで行動の継続を促すことができるだろう。今後、いかに行動を日常的に継続させられるかも考えていかなくてはならない。

謝辞

本プロジェクト活動につきまして、研究実施者と連携し取り組んでくださった B 市教育委員会事務局指導課主幹の谷岡伸悟様はじめ B 市教育委員会の皆様、プロジェクト参加者の皆様、プロジェクト実施にご尽力くださった皆様に感謝を申し上げます。

引用文献

- 学研教育総合研究所（2013）．「小学生の日常生活に関する調査」<<http://www.gakken.co.jp/kyouikusuouken/whitepaper/201303/index.html>>（2017 年 10 月 5 日）
- Goto A. (2017). The difficulties of help-seeking by bystanders from teachers for bullying poster presented at the 18th European Conference on Developmental Psychology, <<http://www.ecdp2017.nl/wp-content/uploads/sites/43/2017/08/ECDP2017-Abstract-book-V2.compressed.pdf>>（August, 31, 2017）.
- 石隈利紀・小野瀬雅人（1997）．スクールカウンセラーの求められる役割に関する学校心理学的研究—子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より— 文部省科学研究費補助金・研究成果報告書
- 松尾直博（2002）．学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向：学校・学級単位での取り組み 教育心理学研究 50, 487—499.
- 三島美砂・宇野宏幸（2004）．学級雰囲気及ぼす教師の影響力 教育心理学研究, 52, 414—425.
- 文部科学省(1999)．生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ —「青少年の[生きる力]をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」—（答申）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_gakushu_index/toushin/1315211.htm>（2017 年 10 月 5 日）
- 文部科学省（2016）．平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（確定値）について <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/02/_icsFiles/afieldfile/2017/02/28/1382696_001_1.pdf>（2017 年 10 月 5 日）

- 森田洋司・清水賢二 (1986). いじめ—教室の病 金子書房.
- 永井 智 (2012). 中学生における援助要請意図に関連する
要因：援助要請対象、悩み、抑うつを中心として 健康
心理学研究, 25, 83-92.
- 大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和 (2009). 児童・生徒の教師
認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響 —媒介要因として
の学級規範と罪悪感— 教育心理学研究.57, 324-335
- 尾関 美喜・吉澤 寛之・中島 誠・吉田 琢哉・原田 知佳・
吉田 俊和 (2008). 社会環境が子どもの向社会的行動に及
ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心
理発達科学, 55, 47-55.
- 尾関 美喜・吉澤 寛之・中島 誠・吉田 琢哉・原田 知佳・
吉田 俊和 (2009). 地域住民との社会的交流が子どもの向
か社会的行動に及ぼす影響——地域からの恩恵と地域への
愛着による媒介モデル—— 名古屋大学大学院教育発達科
学研究科紀要. 心理発達科学, 56, 1-9.
- 佐藤美和・渡邊正樹 (2013). 小学生の悩みとそれに対する援
助要請行動の実態 東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科
学系, 65, 181-190.
- 清水貴裕・瀧野揚三 (1998). いじめの加害者に影響する被
害者と第三者の反応 大阪教育大学紀要. IV, 教育科学 46,
347-363.
- 戸田有一 (2013). いじめ研究と学校における予防実践支援
発達心理学研究, 24, 460-470.
- Young, Sue (2009). Solution-Focused Schools, Radala &
Associates, U.K. (スー・ヤング著 黒沢幸子監訳 (2012).
学校で活かすいじめへの解決志向プログラム——個と集
団の力を引き出す実践方法, 金子書房)

家庭・学校・地域で連携したいじめ予防活動の推進

付録 1 2016 年、2017 年のプロジェクト実施後のアンケートの記述抜粋

	2016 年
講演①	<ul style="list-style-type: none"> ・大人もネット利用のルールを知る必要があると思いました（保護者）。 ・子どもにしかわからないところを大人がどう対応できるかがとても難しいと思いました（教職員等学校関係者）。 ・わからない所で、問題がある事が心配です。学校でよく指導して頂きたいです（地域の子ども支援関連機関職員等）。
講演②	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの内面は見るようにしてはいても、実際は表面だけの言葉のやりとりが多いと反省しました（保護者）。 ・子どもたちの生活が随分と変化していることに意味、衝撃を受けました。家庭の中でも孤独になっていること、折り合いをつけられないことに納得しました（教職員等学校関係者）。 ・ブロック大会の話などをきいて、自分の年代が考えるよりはるかに簡単に関係を切ったり、自分の情報を流したりしていることに驚きを感じました。教育の中でできることが多くあると思いました（教職員等学校関係者）。 ・子どもが何を考えその背景には何があるのか、きちんと観察する必要があると感じました（地域の子ども支援関連機関職員等）。
ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめをなくす為にと考えると、とても構えてしまって、大きなことのように考えてしまいましたが、そうではなくて家庭生活において、子ども達一人一人と明るく過ごす、会話を大切にする事で、子ども達自身の心が満たされ、相手の気持ちを考えられる子に育っていくのだと思いました（保護者）。 ・小さな事から大きな結果を生むという事がリアルに分かりました（保護者）。 ・「問題をへらすよりも相対的に減らすこと」の大切さを学びました。少しでも見方をかえることが大切だと思います。保護者の要求に対して、きちんと向きあいながらも余裕がもてる対応を考えていきたいと思います（教職員等学校関係者）。 ・今後、学校、保護者間でも同じようにワークショップができると良いですね（教職員等学校関係者）。 ・子どもに関わるたくさんの方と交流でき、良かったと思います（地域の子ども支援関連機関職員等）。

	2017 年
講演①	<ul style="list-style-type: none"> ・誰でも自分を認めてほしい気持ちがあるという事を意識し、配慮をしつつ、自己主張すべき点はしていく事、「お互い様」の気持ちを育ててあげたい（保護者）。 ・アサーションを学んでみたいと思います（保護者）。 ・短い時間でしたが、とてもわかりやすい講演でした。“アサーション”を意識して子どもたちに関わっていききたいです（教職員等学校関係者）。 ・アサーション的発想の大切さを社会に広めたいと思っている一人です。自他ともに大切に、問題解決の働きかけができると良いですね。まず大人がアサーションを学ばなければと思います（地域の子ども支援関連機関職員等）。
ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に考えるきっかけをもらいました（保護者）。 ・楽しく学べました。子どもと話し合えるネタになった（保護者）。 ・グループで、保護者、子どもと立場の違う方と話すことで、教職員とは違うイメージを持ってみえるのを知れて良かった（教職員等学校関係者）。 ・グループで話し合い、様々な考えをきくことはとても勉強になりました。いろいろな意見があるということは、いろいろな子どもがいるということでもあり、対応をその子に応じて変えていきたい（教職員等学校関係者）。 ・小さな事でもできること、行動を起こすことは、大切なことだと思います（地域の子ども支援関連機関職員等）。 ・「何ができるか」を考える機会は、いつ、いくつあっても良いと思うので、様々な機会にみんなで考えたい（地域の子ども支援関連機関職員等）。